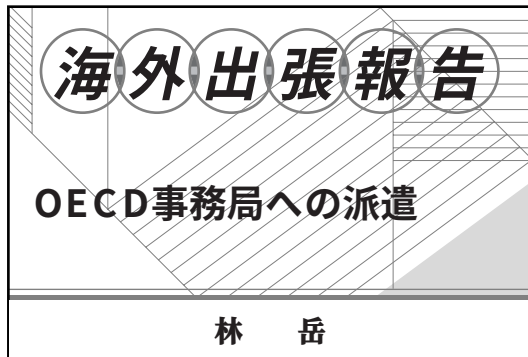




昨年9月13日から本年1月3日まで、OECDにおいて進められている農業環境指標改訂作業に従事するため、短期コンサルタントとしてパリのOECD事務局へ派遣された。

農業環境指標はOECD事務局が進めているテーマの一つで、農業と環境の関係をあらゆる指標で把握するものであり、現在第3版が公表されているが、この夏を目途に第4版への改訂が進められている。昨年12月7日から3日間、パリにおいてメンバー国が集まり指標について検討する国際会議が開かれ、私はその会議に向けた資料の作成、および第4版の公表に向けたデータの更新作業に携わった。私はとくに農業と環境に関するあらゆるデータを各国から次々と送られてくる最新のものへ更新し、図表に反映させる作業を任されていた。また、各国からはデータとともに農業環境指標の改訂内容や図表に関するさまざまなコメントが送付されてくるので、それも一つずつ資料に反映させなければならない。このようなデータやコメントを反映させる作業は、コメントの内容を精査し図表と照らし合わせ、さらには図表の元となったバックデータを確認しなければならず、時間のかかる作業だった。

一方で、作業の中で各国から送られてくるデータや作成した図表から各国の農業や環境の事情を垣間見ることができるのは楽しいことであった。たとえば、ハンガリーやチェコといった東欧諸国は90年代から化学肥料の使用に対する補助金が大幅に削減され、急激にその使用量が減少していた。また、オランダ

など環境問題に大きな関心を寄せている国は、送られてくるデータも詳細かつ豊富であった。

さて、私が籍を置いていたOECD事務局の食料・農業・水産局は、加盟国から多くの農業経済学者が集まるところで、私も彼らの仕事を間近に見ることができた。多くのスタッフは学術的なバックグラウンドをしっかりと持ち、自らの発言や発表論文においても重い責任感を感じながら仕事を進めている姿がとても印象に残っている。彼らの研究は直接的にOECDの施策に反映されるものが多く、自らの研究が国際的な農業動向に大きな影響を与えていると自覚し、高い誇りを感じているように思えた。

そして、私もセミナーという形でスタッフに自らの研究内容を報告する機会を設けて頂いた。セミナーではあらゆる角度から貴重なコメントを頂戴し、研究の問題点を抽出し、今後の課題を明確にすることができた。このような貴重な機会を与えて下さり、貴重な時間を割いて参加してくれたスタッフには大変感謝している。

今回のOECD事務局への派遣に当たり、私は初めての海外生活をフランス・パリで送ることとなった。パリでは街中を歩いてもメトロに乗っていても、お恵みを求めてくる人が多く、さらには彼らに対してコインをあげている人が多いことは私には意外だった。宗教的な面も大きいのかもしれないが、フランスは個人主義の国といわれながら、実は相互扶助の精神も国民に根づいているのだろうか。日本では「お金を払わなければいけない」、「払わなくてよい」という状況がはっきりしているが、フランスではチップやお恵みなど「払っても払わなくてもよい」という場面にたびたび遭遇する。ただ乗りが可能なこのような状況を経済学的な効用理論でどのように説明できるかなど、余計なことを考えながらパリの街中を歩いていると、道端にある犬のふんを危うく踏みそうになってしまった。道端のふんの多さにはただ驚くばかりである。